Meisei University

「『漏斗戸』主」について

天野　節*

一　はじめに

作者高暁声は、一九九九年七月八日、七一歳で逝去した。[1] 同人誌『探求者』の創設を企図して以来の友人陸文夫は、彼の臨終の模様を「生活は創作とは異なり、高暁声には創作の手法をもってして理想的な家庭を築き上げることなぞできるわけはなく、長期間孤独や、感動、さらに動揺不安の中で、体は日々衰弱し、性格は益々内向的になり強情になっていき、決して己の思いを変えようとはしなかった。だが、その理想的な家庭は終に築き上げられずに、正に死の瀬戸際、すでに話をすることもできなくなっているなか、指で虚空に大きな文字を描いた。側に立っている者すべてにはっきり読み取れた。『家』という文字であった。[2]」と書いている。

こうして生涯を閉じた高暁声の作家活動再開後の初期の作品と言える「『漏斗戸』主」には、何がどのように描かれ、どのような思いが作者を駆り立てていたのか、論じたい。先ず、梗概を述べ、背景と作品の特徴、作品を生み出した作者の思いを述べる。

注

(1) 高暁声とその作品については、天野節「高暁声の略歴とその作品」日本中国当代文学研究会会報二〇〇〇年九月第一四号に記載がある。

(2) 陸文夫「又送高暁声」『収穫』一九九九年第五期一五〇頁～一五二頁。

二　あらすじ

主要登場人物は、中国江蘇省南部の〝陳家村〟の農民陳奐生。[1] 両親が残した三間の『ボロ屋』に住む。[2] 一九六四年三四歳で結婚相手に恵まれ、その後三年の間に二人の子どもができる。[3] 大きな丈夫な体を持ち、働き者であるが、性格は直情径行、物事に対して目算を立てることさえ知らず突っ走り勝ちである。[4] それに陳奐生の父方の従兄で小学校教師陳正清。[5] 陳奐生の相談役。

陳奐生は、一九六四年所帯を持って以来十年ほど、常に自家用米が不足し、収穫後自分の家の分として配給される米は、『漏斗』と同様、上から下へと通り抜けるように無くなり、時には、米を闇市で売り塩を買って野菜を米代わりにして餓えを満たすこともあった。集団の貯蔵食糧から或いは他人から借りることができる間は、借米をして食い繋いでいた。人は彼のことを「『漏斗戸』主」と呼んだ。

彼は絶えず腹を空かせ借米に走り回りながら、精一杯知恵を絞り、なぜ自分に飯米不足の状態が続くのか考えた。

彼の飯米不足の状態は、もともと「食糧難を乗り越えていないから、

NII-Electronic Library Service

Meisei University

彼の要求（彼の腹を満たすだけ配給すること）を満たすことはどうしてもできない[6]」時代であった上、妻の実家から本来移すべき妻の配給分を移す手続きをしていないことから始まり、生まれた子どもの配給分が、正月に生まれたので、その年の分は、規定で配給されなかったことからさらに強まったのだ。

七一年は豊作で『三定』政策[7]に基づく分配がなされるはずであった。陳奐生も「食糧不足所帯」から解放されるはずだった[8]。ところが、「一斤でも余れば売らなければならぬ」ということで公式通りに処理され[9]、期待した飯米は手に入らなかった。「食糧分配を増やせば、闇市がはびこる[10]。」という理屈だった。「公社が派遣した幹部は、生産量千斤を達成するために、籾を干さずに分配した[11]」こともある。二期作の出米率は、粳稲の五%から十%低いにも拘わらず同じように分配される[12]。「なぜ大勢の人間たちに影響を及ぼす問題であるのに、解決の努力が成されないのか[13]。」これが陳奐生の疑問だった。従兄の陳正清にこの疑問をぶつけると、彼は、「『革命』は自分たちの腹を改造する段階を向かえている。」、どうしようもないと諭す。それでも耐えきれなくなった陳奐生は、彼に、上級に手紙を書いて実情を訴えてくれと頼むが、「一部の人間たちに社会主義を攻撃するのかと責められることになる」と苦しむ彼を見て、「やっぱり様子を見るべえ」と言う[14]。

一九七八年夏の分配が終わり、「やっぱり様子を見るべえ」と希望を捨てていた陳奐生であったが、秋収穫の二期作の水稲も大豊作であることがわかり、『三定』政策に基づく分配が実行された。こうして陳奐生は、十年以上被り続けた「『漏斗戸』主」の帽子をようやく脱ぐことができたのである[15]。

注

（1）この作品には、小説の背景である場所（地域）を特定していないが、陳奐生シリーズ第四作「包産」（初出の原題は、「陳奐生包産」である。しかし、陳奐生シリーズ七作品を一つにまとめた「陳奐生上城出国記」上海文芸出版社一九九一年十二月第一版では、「包産」と題されている。以後、シリーズ作品の題名と引用文、引用個所はすべて上記の記載に基づく場合、書名は記さず当該頁と行数のみ明記。）に、「一九八〇年虽然受自然灾害的影响减了产、但是苏南农村的气氛却新鲜而活跃。」（七一頁第一行）また第五作「戦術」には、「……陈家村上的人、自然就把陈奐生放在『先富户』里头了。」（八二頁第二行）とある。

（2）陳奐生の住居の経緯は、この小説では、「……、他父母生下四男四女、女的嫁说、三个男的都和女的一样嫁了、单留他一个养老。而他尽了一切责任以后、父母却只遗留给他三间极小的破屋、……」（三頁第十一行～）とあり、「戦術」には、「这三间屋虽破、奐生原先只分到一间、其余两间、还是他有了孩子以后、由张坤大的母亲、也就是奐生的大姐姐出面、向儿位已经迁居在外面兄弟商量、才把分在地们名下的两间一起让给奐生的。」（九六頁第一七行）とある。

（3）陳奐生の年齢については、この作品の中に具体的には書かれてはいない。しかし、他のシリーズ作品から、この作品の時期は、一九七四年前後から一九七八年末で、彼の年齢は、四四歳前後から四七歳までであることがわかる。

①一九七八年秋作収穫後『三定』政策が実行された。

「一九七六年冬季分配过去了、一九七七年又过去了、一九七八年夏季分配又过去、双季稻的前季稻又分配了、一切如旧、政策不动。」（一〇頁第二行～）「秋忙过去了、分明是继夏熟大丰收以后的又一个大丰收、…」（一一頁第九行）「一个星期六的旁晚、陈正清从学校回家、兴奋地大声对奐生说：『看你再不相信吧、今年就要照一九七一年的三定办法分配！』」（同第一二行～）「谣传却愈来愈多、终于很快就证实了、队长传达三级干部会议公布的分配办法、同陈正清说的一模一样。」（同第一二行～）「在陈奐生名下、一共分配到三六〇五斤粮食、比去年的二二五九斤多了一三四六斤、…」（一三頁第九行～）

②この年、彼は四七歳でその翌年、シリーズ第二作「上城」では四八歳であった。「戦術」に、「他当『漏斗户』主、一直当到四十七岁、…」（八一頁第九行～）「陈奐生那次上城卖油绳、…中略…那一年他已经四十八岁、…」（八一頁第一行～）とある。また、このことからも、次のことからも年齢は数え年であると推察できる。「他儿子大毛十四岁、刚进初中……」（八八頁第四行）

③結婚相手を捜し当てたのは、三四歳だった。「而他尽了一切责任后、…中略…拖

NII-Electronic Library Service

Meisei University

倒三十四岁才算找到了这个对象。」（三頁第一二行）

④この作品の時代は、「当时陈奂生还只是个『新生』的缺粮户、仅仅是因为老婆过门时家『忘记』把她的口粮带过来造成的。」（三頁第三行～）「近十年来、他年年亏粮、……」（一頁第三行～）と彼の結婚から十年ほど経過している。

⑤以上から、陳奂生の結婚した年は、一九六四年で三四歳、この小説の時代背景は、それから十年ほど後だから、一九七四年前後から、一九七八年末とわかる。

（4）「年轻的时候、陈奂生有个绰号『青鱼』。这是赞美他骨骼高大、身胚结实；但也有惋惜他直头直脑、只会劳动、没有打算的含义在里面。」（一頁第一六行）

（5）「这一声长叹、偏偏被他的堂兄、小学教师陈正清听见了。」（四頁第二二行）

（6）（二頁第二三行～）

（7）『三定』政策の、『三定』とは、「生産量、買い入れ量、販売量を一定にすること」で、もともと一九五四年に七十億斤多く買い入れてしまい、翌年一九五五年、『三定』政策を行い、二百億斤余りの食糧を農民の手に渡したというときの政策（※）である。しかし、石田浩著「中国農村経済の基礎構造」（晃洋書房）によると、「一九五五年秋より国家の食糧強制買いつけノルマは、『三定』として生産量、留糧（口糧・種子・飼料）、統購量の三つを定めるという方法で決められ、…中略…交售糧（供出量）は、（栽培面積×一畝当たりの予測生産量）－口糧（人口×四八〇斤）－種子（栽培面積×約三十斤）で算出され、予測生産量をどのように見積もるかによってそのノルマが決定された。」という。農民にとって歓迎すべきものかどうか、飯米の分配が多くなるような政策かどうかについて言えば、前者より後者は不確定要素が強い。しかし、ここでは現に農民に歓迎される政策となっている。※人民出版社出版新華書店発行「毛沢東選集第五巻」一九七七年四月第一版『論十大関係　四国家、生産単位和生産者個人的関係』（二七三頁第一六行～）

（8）（四頁第三行）

（9）（同第四行～）

（10）（七頁第一〇行～）

（11）（四頁第一四行～）

（12）（一〇頁第八行～）

（13）（三頁第三行～）

（14）（九頁二五行～）

（15）（一三頁第九行～）

三　作品の特徴

（イ）時代を映す鏡

この作品が描かれた農村、農民の情況はいったいどうであったのであろうか。一九七四年前後から一九七八年末までの中国江蘇省南部の『陳家村』。『陳家村』は、作者が生まれ育ち、その後右派のレッテルを張られて二十一年あまり過ごした常州市武進県鄭陸郷董墅村をモデルに名づけられた架空の村である。ここは、この間どのような情況であったのか、正確な資料はない。しかし、石田浩著「中国農村経済の基礎構造」（晃洋書房）には、上海市郊外の奉賢県についての詳細な調査資料が報告されている。また、費孝通著、大里浩秋・並木頼寿訳「江南農村の工業化」（研文出版社）所載の「江村五〇年」という文章の中に、江蘇省呉江県の開弦弓村（江村）の一九三六年以降およそ五十年にわたる情況が述べられている。上記二つの資料は、ともに鄭陸郷董墅村のそれではないが、ここから奉賢県、呉江県までは、直線距離にして、それぞれおよそ一七〇キロ、九〇キロの長江河口のデルタ地帯であり、これらから当時の情況を類推することは、可能なのではないかと考える。

「江村五〇年」によれば、「……今世紀の三〇年代に私が初めて訪ねたときには、…中略…当時の農村は全国的にそうであったが、江村の大多数の農民もまさに飢餓線上であえいで[1]」いた。「江村の農民が経済面で一人立ちできるようになったのは、全国の農民同様、解放後の土地改革からであった。一九五一年の元旦前後に進められた土地改革で、江村の九四％の農家が土地を手に入れた[2]。」

以後農業集団化が開始される。江村の方は、「家庭を経営単位とする

NII-Electronic Library Service

Meisei University

小農経済は制約」「…中略…――土地が分散化した。…中略…自然災害に対する抵抗力が弱まった。…中略…各農家間で労働力と農具の不均衡が生じた。――」があったので、「協同経営に変えることは必然のなりゆきだった。[3]」そうであるが、奉賢県のある村では、「農業集団化に対する必然性やその基礎は比較的弱く、互助組や初級合作社レベルの農業集団化においてさえ、上から半強制的に実施しなければならなかった[4]」そうで、地域によって過程は若干異なるが、農業集団化は大体自然村を基礎にして、互助組、初級合作社、高級合作社（初級より規模は大きいが、地主、半地主、富農は参加していない）、人民公社へと規模と内容を変え、奉賢県では一番初めのは一九五九年九月一七日に[5]、江村では一九五六年秋[6]に、成立した。

しかし、こうした集団化は、「あまりに急ぎすぎて社会発展の客観的な規律に背」き「結果として、六〇年代初頭の困難な時期がもたらされた[7]。」その後、「一九六二年人民公社は、調整・整頓を行い、公社・生産大隊・生産隊の三段階所有制をしき、…中略…農村の経済秩序はもとの安定した状態を回復した[8]。

だが、「一九六六年に始まった『文化大革命』は、…中略…動乱の初期、農村にもその影響が及んで、損害を受け[9]」てからの農民の生活は、「……八年間の食糧生産高はすでに限界に達しており、しかも生産コスト・労働力・労働日数とも増加傾向にある……[10]。」と指摘されるように、非常に厳しいものになっていった。

こうした情況が、この小説の前提条件となる背景にあったと言えるのではないかと考える。作者自身「談談文学創作」の中でこう明かす。

「私は『（漏斗戸）主』という一篇の小説を書いた。…中略…私たちの周りにこんな人間が居たのだ、私たちの所では誰もが知っている、私が書いたのはそういう彼なのだ。彼は私と同じ生産隊で、『（漏斗戸）主』の形象であり、事象はほとんど彼の身に起きた事で、少しも手を加えていないし、他の人の身の上を題材に取り入れてもいない。まさに彼であり、彼の妻であり、彼の子どもたちなのであり、彼の一家の真実の記録であると言えるのだ[11]。」

作者は「創作方法としてリアリズムを基本にすえており、社会構造とその中に生きている人間の意識内容を…中略…本質的に反映してい[12]」たのである。この作品はやはり一九七〇年代の中国江南農村の一農民を描くことを通し、時代を映す鏡の役割をも担っているのである。

（ロ）作者の批判精神

作者は、小説の創作態度についてこう語っている。

「さらに注意しなければならないことは生活の真実を芸術の真実に変える時、絶対に生活の中の矛盾を覆い隠してはならない、また生活の中の矛盾の性質を変えてしまってはいけないということです[13]。」

作者は、陳奐生という形象を創造した時にも、この生活の中の矛盾を矛盾として描こうとしたはずで、その創作態度がこの作品に反映されていると思う。陳奐生は、身体は頑丈で、人一倍労働意欲もあり、恐らく階級成分で言えば『貧農』であろう。本来真っ先に救われなければならない、そんな彼が、解放後、なぜ充分に食べて行けなかったのか。それも、この小説で述べられている期間だけで十四年間もある。これは、事実である。この事実を描くということは、そのまま読者にとっては、作者の最大の批判精神の現れである。

また、陳奐生の相談相手の陳正清の言、

「社会主義には、あんたが言うような事実は全くあり得ないか

NII-Electronic Library Service

Meisei University

らだ。[14]」「だが、あんたはわかっていない。事実というのは、必要性に奉仕するものなのだ。あらゆる事実は、すべて社会主義は天国であることを証明できなくてはいけないのだ。だからあんたの言っているのは皆事実ではないのだ。もし俺があんたの為に、こんな手紙を書いたら、毒草になってしまい、飯の種をぶち壊されるばかりでなく、地面に転がされ、足で踏んづけられ永遠に足腰が立たなくなってしまうのだ。[15]」「現在の『革命』は純粋に精神的なもので、非物質的であり、腹と絶対矛盾し、肺と絶対統一するものなのだから、どうしても腹を肺に改造し、双方から同時に新鮮な空気を呼吸しなければならないのだ。[16]」これらも作者の風刺の眼、社会批判と私には取れる。

（八）農民の描き方

高暁声の描く農民像については、他の陳奐生シリーズ作品に登場する陳奐生という形象について、相浦杲先生も、「農民らしい[17]」と指摘しておられるが、「『漏斗戸』主」の陳奐生とその周囲の農民の描写については、私は、初めてこの小説を読んだ時、非常に印象深く感じたことの一つである。それは、（陳奐生たちは、まさに日本のわれわれのすぐ近くにいる農民たちとまったく変わらないではないか）ということであった。それほどごく自然に、しかも非常に身近な存在として、暖かく優しく農民を描いている。その一つは、自分の利害を時に無視してでも、周囲の人間に気配りをする人の良さを描き出していることである。陳奐生飯米不足になるそもそもの初めは、妻の実家から妻の配給分を貰わなかったところからであった。「奐生、お前飯米を貰いに行くのは当たり前じゃあねえか。遠慮すことじゃねえ」と周りのものに忠告されるが、彼はひどく感情的になって、「先様じゃ娘をくれるのまで承知してくれたんだ。飯米のことなんぞ、どうして言い出せるもんかね。[18]」と答え、その人の良さ振りが描かれている。また、自分たちの情況を訴える手紙を従兄の陳正清に書いてもらいたくて訪ねたのだが、「陳奐生は、正清がこんなふうに苦しんでいるのを見て、いつもと変わらぬ顔に自身ありげな微笑を浮かべて言った。『やっぱり様子を見るべえ。[19]』」この描写も、他人への心使いが優先されている。

二つ目は、自分の要求を単刀直入に相手になかなか切り出せない弱さ、そして優しさでもある面を描写していることである。「夕方になると時々彼は、懇意にしている家にぶらっと立ち寄り、両手をズボンのポケットに入れ、頭を垂れてじっと坐り込み、一言もしゃべらず夜遅くまで坐り続けて、そこの主の気持ちまで滅入らせ……[20]」てしまう。「米を貸して欲しい」と一言言えば済むのに。

三つ目は、一部の周囲の農民の陳奐生に対する否定的な見方を述べる部分では、人の持つ意地の悪さも然り気無くごく自然に描いていることである。「……たとえ腹が減り頭がくらくらして目がかすもうとも、社員とともに野良仕事をし、手を抜くことも不平を言うこともなかった。…中略…だが、薄情な者は言った。『奴は仕事をしねえじゃいられねえんだ。やらなきゃ、もっと食えなくなっちまうんだから。[21]』」また、「陳奐生は、元来まめで、しかも喜んで人の手助けをする。人に少しでも頼まれれば、ほとんど断ることはなかった。ずっとそうだった。だから、この点を否定するものはいない。…中略…けれど、…薄情な者は、『タバコ一本くれりゃ、奴は半日付いて回るよ。』とまで言い、果ては、一週間たった一度の米の飯を食っただけで、『あれば、おっ死んじまうほど食うんだ。』とか『餓死した幽霊みたいなもんで、食ってる時の顔なんざ見やされねえぜよ。』と陰であてつけた。[22]」

NII-Electronic Library Service

Meisei University

四つ目は、話だけではなかなか物事を信用せず、眼前の事実に注目する農民らしいしぶとさを描いていることである。「十年来混乱に混乱を重ね、めまぐるしく変化した政策は、彼の心にくっきりと、しかも、メチャクチャなものとして焼きついていて、迷信のように『七一年』という三文字が不吉なものに思われた。あの悪夢が再び煙のように立ち込めるのをひどく恐れ、心に潜む渇望を無理やり抑え自らを戒めた。『やっぱり様子を見るべえ。』[23]」というように。

五つ目は、こうした人物像の活写を支える農村事情をその内側から具体的に捉え描いていることである。天火に乾燥させた籾と、そうでない籾とでは十一%も量の差がでるとか[24]、「養豚の目的は、（農民の方では）奨励米を手に入れて飯米を補うことにあった[25]」とか、「『余剰米が出れば売らなければならない』というのは、農民の食糧に対する必要性を、収穫量の増減と無関係だと考えていることだ[26]」とか、「二期作稲の出米率は粳稲の五%から十%だ[27]」等である。

これらは、農民とともに生活したからこそ作者の身中に薫き込められた見方ではなかろうか。そうした作者の作者らしさが発揮されている面であると思う。

注

（1）費孝通著、大里浩秋・並木頼寿訳「江南農村の工業化」（研文社）所載「江村五〇年」（一九九頁第一二行～）…以下「江村五〇年」と記す。
（2）「江村五〇年」（二〇一頁第一八行～）
（3）同（二〇三頁第一八行～）
（4）石田浩著「中国農村経済の基礎構造」（晃洋書房）（三〇頁第一行～）…以下「奉賢県」と記す。
（5）「一九五八年九月一七日に奉賢県では紅旗人民公社が真先に成立……」（「奉賢県」七三第二二行）
（6）「江村五〇年」（二〇六頁第五行～）
（7）同（同第一〇行～）
（8）同（二〇七頁第一〇行～）
（9）同（二〇八第二行～）
（10）同（二〇八第九行～）
（11）（「生活・思考・創作」的「谈谈文学创作」上海文艺出版社一九八六定八月第一版五第九行～）
（12）相浦杲著「中国文学論考」（未来社一九九〇年五月三〇日第一冊発行）所載「小説を通して見た中国農村の構造と農民の意識」三一八頁。相浦杲先生は、高暁声の作品では、ここで「李順大造屋」「陳奐生上城」「陳奐生転業」を通じて述べられているが、残念ながら『『漏斗戸』主」には、言及されておられない。
（13）（「生活・思考・創作」的「漫谈小说创作」一四一頁第二六行～）
（14）（八頁第二十行）
（15）（同第二二行～）
（16）（五頁第一行～）
（17）上記注（12）「中国文学論考」○「だから、彼は…中略…農民の一般的典型なのである。」（三五〇頁第一三行～）○「……、ここに農民のたくましさを発見することができる。」（三五一頁第七行）○「この陳奐生の要求の出し方にも農民らしい、石橋を叩いて渡る式の手堅さを感じさせられる。」（三五三頁第六行）○「陳奐生が呉書記の家の畑仕事を勤勉にやってのけ呉書記を感激させた点一刻も労働しないでじっとしてはいられない農民気質をよく物語っている。」（三五六頁第九行～）
（18）（三頁第七行～）
（19）（9頁第二五行～）
（20）（五頁第二二行～）
（21）（六頁第十一行～）
（22）（同第一六行～）
（23）（一一頁第二三行～）
（24）（四頁第一六行～）
（25）（七頁第一三行～）
（26）（同第一五行～）
（27）（一〇頁第9行～）

NII-Electronic Library Service

Meisei University

四　まとめ

陳奐生は、どのようにして高暁声によって生み出されたのだろうか。「陳奐生出国上城記」は、作者の次のような文章で締めくくられている。

「私は以前次のように語ったことがある：『……私が書いた陳奐生は、客観の反映でもあるのだが、同時に私自身の影でもあるのだ。……』『私が気分が重苦しく、嘆かわしいとするものは、陳奐生は無論のこと自分自身も、ともに未だ因襲の重さから抜け出せずにいるということなのだ……』と。私は、陳奐生は私と同一であると自覚しているのだ。作家として、それだから『私は彼らを書いて、私の心を書いたのだ。』と言えたのである。こう語って、十二年経ち、現在に至るが、私は、これらの言は最も根本的なものであることはいささかも変わらないと考えている。一人の個人として、私は陳奐生に似ていて、抜け目なく取り入ることも、自分を守ることもできない。もちろん陳奐生の純朴さには及ばないが、培養基（培養の為に用いる、養分などを含む液状や固形の物質―注引用者）としては、陳奐生より少し経験豊富だ。私が地に倒され横たえられて彼らの足で踏みつけられた時、足が支えていた彼らの身体は、きっともとも少しだけ高かったのではなかろうか。ただ手を伸ばしたら月を引き寄せられるほどかどうかはわからなかったが、もしまだ高さが足りなかったら、さらに陳奐生を下に敷いて見たらどうだったろうか。[1]」

ところで、高暁声の作品には、彼自身の生活の過程を作品化したと思われるものが非常に多いように思う。彼の作品世界と彼の体験した現実、フィクションと現実が、「捻り飴」のように絡み合い分別が難しいほどである。「系心帯」の主人公李稼夫（設定は右派分子とされて農村に送りこまれた技術者）、「青天在上」の陳文清（モデルは作者自身）と周珠平（モデルは高暁声の最初の妻、雛主平）[2]、陳奐生シリーズ作品では「出国」の辛主平（高暁声というペンネームで陳奐生シリーズを書いていたという）登場人物等がそれらである。陳奐生に至ってはそのモデルは、〇奐生と名前まで全く同じ者だ。これは前項の「ロ」で、引用した高暁声の創作態度「生活の真実を芸術の真実に変える」ということを貫こうとするところから出た必然ではないかと思われる。こうした基本から出発し、右派として故郷に戻され二十年余り農村で生活する中で得られたものと、「なぜ無実の者が、罪を問われなければならないようなことが、起きるのか」という自身の『右派』とされた体験[2]によって得られた追求心によって生まれたもの、これが『漏斗戸』主、陳奐生ではないかとおもわれる。上記「陳奐生上城出国記」の「後記」の文章で言い表されているのは、これだと考える。

また、陳奐生シリーズ作品は、この作品の後、「上城」、「転業」、「包産」「戦術」「種田大戸」「出国」と書かれた。第一作の『『漏斗戸』主」が、前項（イ）で引用した通り「一家の真実の記録」であり、後の作品は、この第一作を基礎に作られたフィクション性の強い作品となっている。一九九九年五月十三日付「文藝報」『祝賀《鈴山》創刊二十周年』という欄に、高暁声は、「私は賞を受けた時に、『私の《陳奐生上城》は、《『漏斗戸』主》の主人公陳奐生の名前を用いている、その目的は《『漏斗戸』主》を救い、読者に注意を促すためであった。』と言った。」と書いている通り、作者にとってもシリーズ作品のうちで、また、彼の全作品中でも非常に大事な作品であると考えられていたのではなかろうか。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

私にとってシリーズ作品七作の内では、「『漏斗戸』主」に最も訴えるものを感じ、最も好きな作品である。

注

（1）（二二六頁第二二行～）

（2）この稿「一はじめに」の注（1）参照

NII-Electronic Library Service